

夫で、友人の爲めには寢食を忘れ東奔西走し友情を傾け尽される方でしたが、其の相手が自分程純情でない事をも又嘆かれる善人でした。墨で和紙に字を書く事が好きで、よく他人の履歴書を書いて居られました。

又人事百般、諸行事等に就いて博識で誰も気付かぬ様な事を知つて居られ、特に運動競技の記録を暗誦して居られるのには感心させられたものでした。ところがこの物識りの福田さんにも燈台下暗しとでも云うか、次の様な挿話があるのです。長崎の商業中心地では日本軍の南京入城を祝して提灯行列をやつていと云う夕でした。福田さんの發起肝入りで、大倉先生を除いた教室全員はサーバント室ですぎやき会をしました。牛肉は一人前百匁で足るだらうかとの福田さんの相談に誰も答えないので百匁宛準備した所半分も食はず、すぎやきに関する人間の食欲の限度を、福田さんも此の時初めて知られた様でした。

それから二十年の歳月が経ちました。実験道具、標本、書籍等々総ては大倉、福田両先生と共に一瞬の内に消失し、今一箇たりとも思い出の品はありません。

然し其の廃墟には現在長崎大学医学部衛生学教室が蘇り幾多貴重な業績を挙げて居られます事は同慶に堪えません。

尙今回記念の文集を編せられるとの事で、ささやかな思い出話を綴つて、責めを塞ぎたいと思ひます。

## 東亜風土病研究所

当時の研究所は二教室に分れ病理学科教室に金子直教授、高山吉晴助手、細菌学科教室に青木義勇助教授（応召中）才津芳雄助手、その他の教室員として雇の平山富士子、岩永ヨシエ、傭人の草野チヨカ、真田篤子、定夫の山口末三郎の諸氏が在籍していた。

### 被爆時の状況

金子教授は小使室の移築中金比羅山麓で、才津助手は大学近くの路上で、平山、草野、真田、山口の教室員は教室内で爆死。

### 故金子直教授の略歴

従五位勲四等医学博士、東亜風土病研究所員（教授）

明治三十三年九月三十日長崎県に生る

大正十四年三年九州帝国大学医学部卒業

大正十五年三月同大学助手に任ぜられ病理学を専攻す

昭和五年二月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和十二年三月病理学研究のため欧米に留學同十四年七月帰朝す

昭和十六年一月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和十七年十月陞敎高等官二等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い爆死取に殉ず

### 主なる研究題目

結核諸病巣に於ける粘液形成、鍍銀性線維の形成或は發生に就いて

死亡者の官職並びに氏名

官	氏	名
教授	金子	直
副手	才津	芳雄
雇人	平山	富士子
〃	草野	チヨカ
定夫	真田	篤子
	山口	末三郎

その日の金子教授

田川 甚蔵 談

当日金比羅山入口江平町に教室の疎開家を建築中、原爆に遭い家の下敷となりやつと這い出したが、頭をひどくやられた。その日は金子教授の家族と男女数名の入夫に病理教室の雇井手口貞市氏もいたが、井手口氏は火傷して一週間後死亡した。金子教授は幸い無傷であったが顔色蒼白となり、傷を負った子供さんをつれて病院の方へ行かれたまゝ行方不明、又同教授の奥様も原爆投下前に山里町へ配給酒を買いに行かれたが行方不明とられた。大学運動場附近に居住していた自分の家も全滅。その後頭髪が抜け生死の境をさまよっていたが、幸い竹内教授（当時病氣のため鳴滝町の自宅で療養中一年後他界された）の計らいにより、教

授の門下生で三菱病院に勤務中の某医師の診察治療を受け約一ヶ年休養後現在事務局施設課に勤務している。

元病理教室雇（現在事務局施設課勤務）